

## 『自閉症の倫理学』 を巡る二、三の事柄

著者	柴田 正良
著者別名	Shibata, Masayoshi
雑誌名	『複雑系科学と応用科学』 沖縄研究会第1回大会 発表資料（スライド）
ページ	22p.
発行年	2011-08-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43250">http://hdl.handle.net/2297/43250</a>

『自閉症の倫理学』  
を巡る二、三の事柄

柴田正良(金沢大学)

<複雑系科学と応用哲学>

沖縄研究会第1回大会,

Aug.29, 2011

# 考えてみたいこと

- 物理主義的世界において、いかなる倫理が可能か？
- 物理主義的世界とは、ここでは、一切の心的・文化的存在が物理的・化学的・生物的存在によって決定される世界のことである。
- 人類は、自分のために、自分の物理的身体と周囲の物理的事物を際限なく操作しようとするであろう。

# 倫理はいかなる状況で発生するか？

1. 現在も、未来も宇宙でまったく孤独に存在する者にとって、倫理とは何だろうか？

2. 彼にとって、「なしたいこと」とは内容上異なる「なすべきこと」はあるのだろうか？

3 「なしたいことをんすこと」→プリミティブな自由

「なしたいこと」の相互調整 → 倫理

◆◆ この意味での倫理は自由の<欠如態>である。

# 共同体テーゼ

複数のメンバーが所属する共同体において、各メンバーが他のメンバーと＜同等の権利と義務＞を持つことができる（少なくともある期間、実際に持つ）。（必要条件）



共同体に属する行為者に、倫理が発生する。

# 歴史上の倫理的共同体 (moral community)

1. 地球の進化史において最も典型的なものは、人類（ヒト）が創りだした最も最近の共同体であろう。 → 黒人・女性・障害者等への権利拡大
2. 人類社会はとりあえず、完全義務対象者から成る倫理的共同体である。
3. その拡大は今や動物（ペット）を含みつつあるが、それは不完全義務対象者として。  
さて、エンハンスメントの結果としてのサイボーグや、ロボットはどうなるのだろうか。

# 例えば、アシモフ

## (しかし、これは倫理ではない)

- 第一条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。
- 第二条 ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。
- 第三条 ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない (『われはロボット』早川書房 p.5)

# 人類の倫理的共同体の 自然的基盤（1）

- 法と道徳がもつ最低限の内容は、人間に課されている偶然的な自然条件に由来する・・・H. L. A. ハート『法の概念』みすず書房
- その5つの偶然的条件
  1. 人間の傷つきやすさ  
人間はときに他人に身体的危害を加えることがあり、また攻撃されれば傷つきやすい。



# 人類の倫理的共同体の 自然的基盤（2）

## 2. おおよその平等

誰も他人の協力なしに長期間、誰かを服従させるほど抜きんでて強くない。

## 3. かぎられた利他主義

人間は悪魔でもないし天使でもない。

## 4. 限られた資源

人間に必要な食物、衣服、居住などの資源は有限である。

## 5. 限られた理解力と意志の強さ

人間は、相互自制のルールがもたらす利益を見通し、長期に保持できる力を持たない。

# 『自閉症の倫理学』

## *The Ethics of Autism*

D. R. Barnbaum, 2008, Indiana U.P.

この著作に対する書評：

“Does autism need a cure?”, by *Simon Baron-Cohen*, [www.thelancet.com](http://www.thelancet.com) Vol 373

◆ この著作の主張は2つ。

1. 自閉症者は、非自閉症者とまったく異なる世界に住む。
2. 成人の自閉症者を「完治させる」必要はない。望めば別だが…

# キーコンセプトとしての 心の理論 (Theory of Mind)

◆バーンバウムは、倫理における自閉症者の根本的困難が心の理論の欠陥からくると考える。

## 自閉症の原因を説明する3つの理論

1. 心の理論説(theory of mind thesis)
2. 中心性統合弱化説 (weak central coherence thesis)
3. 実行機能弱化説(weak executive function thesis)

# 心の理論を欠くとは どういうことか？

1. 心の理論は、他者の志向性を自分とは違った自律したものとして理解し、自分と異なるどんな（欲求・信念・情動などの）心的状態が他者に生じているかの推論を可能とする。



2. その欠如は、心的存在としての他者がまるで存在しないかのような世界を自閉症者に強いる。他者との相互交流、相互信頼を築くことが極めて困難。

# 自閉症者は道徳的共同体のメンバーか？

- ホブソン(P. Hobson) は、他者との関係を欠く人生は価値ある人生ではなく、自閉症者は道徳共同体の外側に位置する、と論ずる。
- ベン(P. Benn)は、反応的態度(reactive attitudes)を取りうるものだけが、他者の反応的態度の対象であり、道徳的共同体のメンバーであるから、自閉症者は道徳的共同体に属さない。

# 自閉症者には、自分が運用できる道徳理論がない

- カントの義務論は、ルールの盲目的な遵守によって運用可能なように見えるが、「他者をそれ自体における目的とせよ」という理解でつまづく。
- ヒュームの理論は、その核心にある同情 (sympathy) も、あるいはそれを可能にする共感 (empathy) も、自閉症者に手の届く能力ではない。
- 他の従来の道徳理論のいずれも、自閉症者が進んで従いうる理論ではない。

▼つまり、自閉症者と非自閉症者をともに適用範囲とする道徳理論は、今のところ存在しない。

## 異世界の存在者との 共生の倫理 (autism-1)

- 自閉症者は、バーンバウムによれば、われわれとは深く断絶した異世界に住む。
- 彼らが無理に「完治させられる」べきでないのは、かれらが「自閉症的な完全さ autistic integrity」をもつからである(バーンバウム)。
- ▼ すなわち、「心の理論」の程度に関してさえ多様でありうる行為者相互の、「同等の権利と義務」を設定すること。

## 異世界の存在者との 共生の倫理 (autism-2)

- しかし、バーンバウムがホブソン、ベンの議論に対抗して、自閉症者を道徳的共同体に含めるための論拠は、「仮に排除が間違っていた場合の代償は大きい」という、いわば「慎重な利害計算」とも取れる。
- 実際には、その論拠は、自閉症者と非自閉症者が<ヒトという同一の種>に属し、日常の利害と生活を共有するという事実にあるだろう。 → ハートの5条件が道徳的共同体の最大域を定めているように思われる。




# 異世界の存在者との 共生の倫理 (enhancement)

- 治療を超えたエンハンスメント  
(enhancement beyond therapy)
- 脳・遺伝子を含めた人体の改良は、「完全な赤ん坊」「完全な大人」「完全な人間」への強い願望を引き起こすだろう。



画一化された「優れた知性」「強い意志」「豊かな感情」「優れた容姿」といった、いわば「美男美女の秀才たち」の世界。それは、従来の「個性と差異」という偶然的な自然条件を破壊する

# 異世界の存在者との 共生の倫理 (cyborgs)

- 治療を超えたエンハンスメントは、やがて、老化の決定的な阻止、果てしない寿命の延長を目指すであろう。
- 壮健な身体のままにおける<不老不死>。  

- 再生医療と手を携えて、<サイボーグ化>の技術がごく普通に人体に適用され、ハートの「人間の傷つきやすさ」や「おおよその平等」という条件は、その実質的意味を失うであろう

# 異世界の存在者との 共生の倫理 (robots-1)

- ロボットの自律(autonomy)のここでの意味

「自らの内部状態から意図的判断を下すことが可能であり、いかなる規則も疑い、拒絶することができる」



自律ロボットは、欲求と信念から構成される態度を持つという点で、最小限の素朴心理学的メカニズム(folk psychological mechanism)を持つ。

## 異世界の存在者との 共生の倫理 (robots-2)

- ロボットたちは、われわれの物理主義的世界では、「同一の物体→同一の精神」というスーパーヴィーニエンス原理に従い、いくらかでもタイプの同一の「心」を備えて出現可能である。
- したがって、「誕生」「病」「治療」「繁殖」「死」などの条件において、われわれとまったく異なる。彼ら相互の間での「同等の権利と義務」とは何か？ 彼らとわれわれの間での「同等の権利と義務」とは何か？

# 異世界の存在者との 共生の倫理（conclusions-1）

1. 共同体テーゼを満たすためには、少なくとも最低限の「心の理論」の保持が必要である。（自閉症者に関するバーンバウムの診断は、少し誇張しすぎであろう）。
2. 異世界の者たちの生存条件がお互いにあまりに異なるので、これまでの人類の倫理・法システムのように、それで内容を決めるわけにはいかない。むしろ新たな<倫理システム>を人為的に、自覚的に制定する必要があるだろう。

## 異世界の存在者との 共生の倫理 (conclusions-2)

3. サイボーグになり、やがて<機械>に進化した人間の「アイデンティティ」はどこにあるのか？ 素朴心理学の提供する枠組みだけかもしれない。

4. 倫理を自由の<欠如態>と考えるなら、理想的な状態は、倫理ができるだけ出番を減らすことである。異質なメンバーがどんな目的、欲求、興味、好み、感情を持っていようと、それを最大限に尊重するようなシステム。

## 異世界の存在者との 共生の倫理 (conclusions-3)

5. 少なくとも、常に最上の人間と同等以上の知力・体力・耐久性・再生可能性を持つサイボーグやロボットは、普通の人間とケアの倫理や介護の倫理で結ばれてはならないだろう（自閉症者の完全性）。

6. すると極めて皮肉なことに、異世界の存在者との共生の倫理において最も大事なものは、他者に危害を加えない限り何をしてしても許されるという「他者危害の原則 harm to others」だということになる。